

保育内容「表現」における学生の学びについて

本 村 弥 寿 子

A Learning for student in contents of child care and education“Expression”

Yasuko MOTOMURA

キーワード：領域「表現」 保育内容「表現」 小麦粉粘土 学生の学び

1 はじめに

1989(平成元)年、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域を保育内容とする幼稚園教育要領が告示された。これは、1956(昭和31)年に刊行された幼稚園教育要領において、「健康」「社会」「自然」「言語」「絵画製作」「音楽リズム」の6領域で示されていた保育内容が、領域別に「望ましい経験」を示すものであったことから、保育現場では領域を小学校の教科のように考え、領域別の指導が行われる傾向が生じていた状況を受けて見直された結果である。つまり、幼稚園教育を子どもの発達に即した、小学校教育とは異なる幼稚園教育の独自性をしっかりと位置付けたのである。

この改訂では、5領域は幼児の発達をとらえる視点であり、保育の内容は領域ごとに特定の活動として取り出して行うのではなく、環境を通しての教育のもと、遊びを中心とする具体的な活動を通して総合的に指導されることが明記された。2008(平成20)年に改訂された現行の幼稚園教育要領も、また、2008年に改定された保育所保育指針、さらに、2014(平成26)年刊行の幼保連携型認定こども園教育・保育要領も、基本的な考え方は1989年に告示された幼稚園教育要領を踏襲している。

保育者養成校においては、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領に示された保育の基本を踏まえて学生の学

びを進めていく。しかし、小学校から高等学校までの12年間、学校での教科教育を受けてきた本学の学生にとって、保育の基本を理解するには時間を要している。特に、長崎女子短期大学幼児教育学科で1年次の前期に行われる保育内容「表現」の授業について、入学当初学生は、音楽や美術に関する保育内容の教授方法を学ぶものであるように考えている。

本稿では、保育についての学びの初期段階である入学直後の学生に、保育の基本や領域「表現」の考え方を伝える方法を探るため、授業を振り返り、学生の得た学びを確認する。

2 保育内容「表現」の授業について

2.1 授業の概要

①授業の概要は以下のとおりである。

科目名：保育内容「表現」

受講対象：幼児教育学科1年生

開講時期：1年前期

授業区分：幼稚園免許選択必修、保育士資格必修

②科目の主題

子どもの表現を読み取り、感性や創造性を豊かにするための援助・指導のあり方や、保育者自身の表現の重要性について学ぶ。

2.2 授業の内容

本科目は、幼稚園教諭免許・保育士資格を取得

するための必修科目である。そのため、毎年1年生全員が受講しており、平成28年度受講数は108名であった。授業は108名を2クラスに分け、週に1回、90分ずつの授業を15回行った。

授業内容は表1のとおりである。

表1 保育内容「表現」 内容

1	保育の基本・目的、保育内容について
2	領域「表現」について
3	領域「表現」における保育内容の歴史の変遷
4	子どもの存在と表現
5	表現を育む環境
6	諸感覚を通しての感性と表現
7	生命に対する感性と表現
8	音楽に対する感性と表現
9	造形に対する感性と表現
10	造形に対する感性と表現（VTR 視聴）
11	子どもの感性と表現を育む保育者の役割①
12	子どもの感性と表現を育む保育者の役割②
13	保育内容「表現」の課題
14	表現遊びの実践（小麦粉粘土遊び）
15	保育内容「表現」で大切にしていること（確認とまとめ）

本学では、保育内容「表現」が5領域の最初に学ぶものであり、入学直後に開講される授業の一つであるため、まず、1・2回目の授業で保育の基本について幼稚園教育要領等をもとに学びを進めている。この科目と同時期に保育内容総論の授業も筆者が担当しているため、両方の授業の中で繰り返し保育の基本についての確認を行っている。

平成22年の「保育士養成課程等の改正について（中間まとめ）」において、教科目「保育表現技術」では、「子どもの表現を広く捉え、子ども自らの経験や周囲の環境との関わりを様々な表現活動や遊びを通して展開していくことが重要であることを踏まえ」、「音楽表現、造形表現、身体表現、言語表現に関する表現技術を保育との関連で修得できるようにすることが必要」と述べられている。そこで、本科目の3回目以降の授業では、子どもの内面は様々な形で表出していること、様々な表出から子どもの内面を読み取り共感することが大切であること、つまり、子どもの表現を広く捉えることを、事例を示しながら丁寧に伝えていった。そして、子どもが多くのことを感じ取り、それを

その子どもなりに表現するために必要な環境構成や援助等を学生が考える機会を作るようにしていった。これらの学びを踏まえたうえで、「幼児音楽」や「幼児体育」などの表現技術修得を目的とした他科目につながるよう配慮している。

2.2.1 表現遊びの実践

幼稚園教育要領解説では、「教師の役割」として、「幼児が行っている活動の理解者」「幼児との協同作業者」「幼児と共鳴する者」「憧れを形成するモデル」「遊びの援助者」および「遊びの援助者」などをあげている。領域「表現」からこれらの役割を見れば、保育者は、子どもの表現の理解者にとどまらず、保育者自身が良き表現者として子どもの前に存在することが重要であると言える。保育者自身が感性豊かに身の回りの事象に興味・関心を示し、自分自身の表現を高めたり、表現する過程を楽しんだりすることが大切である。

しかし、現在の若者は感性や表現が豊かだと言える者が少ないように感じられる。日常生活の中で心揺さぶられることに会っても、素直にそれを感じて身体全体で表わす経験が少なかったと考えられる。本学で保育を学ぶ学生たちも例外ではない。このような学生は、実際の活動において自分を表現する体験を通して心身を開放し、感性を高め、それらが身体の表現と関連していることを感じられるようにすることが必要である。そして、表現活動を経験する中で自分が感じたことを見つめることが、人の表現を受け止め、それに応じる表現を表出することにつながると考える。そこで、本科目14回目では、「表現活動の実践」として学生に小麦粉粘土で遊ぶ活動を経験させた。以下に、小麦粉粘土遊びの展開について述べる。

2.2.2 小麦粉粘土遊びの展開

(1) 小麦粉粘土について

小麦粉粘土は、食品で作った粘土である。子どもが口に入れても安全であるため、3歳未満児であっても使用できる。やわらかな触感で香りも良く、色つけに食紅を少量使用すると淡い色に染まるため、子どもにとっては抵抗なくかかわること

ができる楽しい造形素材である。食品で製作する粘土であるため、乾燥してもカビが生えやすく、長期の展示には不向きである。よって、作品を作って鑑賞するというよりも、小麦粉粘土という素材自体とのかかわりに重点を置いて活動を行うようにしたい。

(2) 小麦粉粘土遊びを授業に取り入れた理由

学生は、“粘土”というと、油粘土や紙粘土をイメージする。幼い時に小麦粉粘土で遊んだ経験の有無を尋ねると、「有る」という学生は100名中5～6名しかいなかった。そのような学生に、まずは子どもに帰って小麦粉粘土に触れることを経験してほしいと考えた。小麦粉粘土であれば、久しぶりに粘土に触れる学生にとっても抵抗感はないだろう。さらに、小麦粉粘土の感触や香りから、必ず何らかのことを感じるだろう。こうして、学生一人一人が遊びながら感じたことを自分なりに表現して楽しむ経験が、後には子どもの感性と表現を理解することにつながると考えたのである。

(3) 小麦粉粘土遊びの方法

事前の授業の中で服装や指輪等のアクセサリーについての注意事項を伝え、さらに、小麦アレルギーの有無についても確認をしておいた。今年度は小麦アレルギーを持つ学生はいなかったため、学生全員が小麦粉粘土遊びを体験することができた。

準備物は以下のとおりである。

材料：小麦粉、水、食紅（赤・緑）

用具：ボール、紙コップ、割り箸

これらはすべて授業者が準備をした。必要最小限の準備にとどめることで、学生が小麦粉粘土の感触を十分に味わえるようにし、遊びながらさらに“必要な物”や“あるといい物”を考えられるよう配慮した。

1グループが4～5名となるようにグループ分けをし、その中の2名が食紅で色を付け、グループのメンバーで赤、緑、白の3色の小麦粉粘土を分け合って活動するようにした。活動の手順はプリント（写真1）にして学生一人一人に配布し、学生の授業後の教材研究に生かせるようにした。

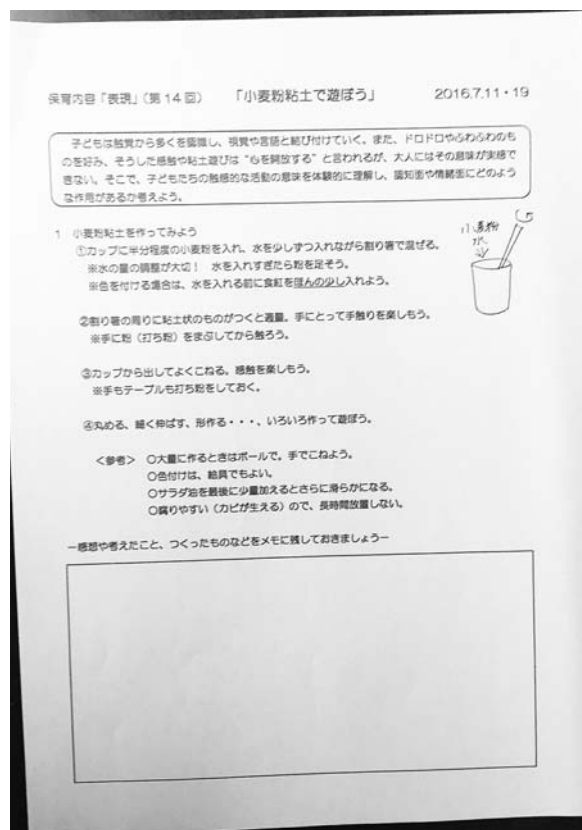


写真1 配布プリント

(4) 小麦粉粘土遊びの様子

小麦粉から粘土を作り、粘土で自由に製作する時間は約50分であった。初め、学生同士様子をうかがいながら小麦粉と水を混ぜていたが、徐々に粘土らしくなってくると楽しさが増し、声を発して感想を言い合ったり製作物を工夫したりする姿が多く見られるようになった。さらには、グループでテーマを決めて作る場所も出た。表情は明るく、声は大きく、他グループの様子を観察したり作品を見せ合ったりするなどの学生姿から、学生が小麦粉粘土に親しみ、その楽しさや面白さが存分に味わえていることがうかがえた。

<学生の作品の一例>

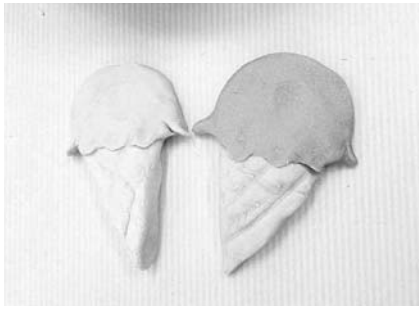


写真2 ソフトクリーム



写真3 ピザ



写真4 おまんじゅう

2.2.3 小麦粉粘土遊びにおける学生の学び

小麦粉粘土での遊びの実践を行った後、学生から様々な感想が述べられた。以下に一部を示す。

- ①初め、触るのが嫌だった。こねるとヌルヌルべたべたして気持ち悪いと思った。でも、だんだんもちもちして気持ちいいなと思うようになり、とても楽しく遊ぶことができた。就職したら、是非子どもたちに遊ばせたいと思う。
- ②年齢の低い子どもには、あらかじめ作っておいた粘土で遊ばせ、年長さんには自分で小麦

粉から作らせてもいいと思った。小麦粉から作ると「サラサラ」「ネバネバ」「ポロポロ」「カラカラ」「べちゃべちゃ」と様々な感触が味わえた。

- ③床にシートを敷き、おしぼりや粘土べらを用意したい。そして、子どもの作品を写真にとって掲示したり、お店屋さんごっこで使ったりしたいと思った。
- ④感触を手で感じ、においをかぎ、色を楽しんだことなど、感じることで子ども豊かな感性を育む体験になるんだと思った。
- ⑤高校生の時に参加したオープンキャンパスで作った時、子どもの気持ちを考えるところまで及ばなかった。今回作ってみて「子どもは初めての感触だろう」などと考えた。
- ⑥自分にしか作れない作品に対して愛着がわいた。友達と分け合って作ったことは粘土を共有した気持ちになり、気持ちも共有できたように思った。
- ⑦体験する中で、あまりかかわりのなかった人とも気軽に声を掛け合って作品を作っていた。遊びながら人とかかわりを生んでいることが分かった。
- ⑧抵抗を示す子どももいるはず。そんな時保育者はどのように接すると良いか考えさせられた。先生（授業者）の対応が参考になった。一言だけでも掛けると意欲につながる。この実践で保育者の行動や教育・保育によって子どもが変わることを実感できた。

上記の感想から、学生自身が表現する過程を体験することで心や感性が刺激されていることが分かる。

①や②では、小麦粉や小麦粉粘土という環境に自らかかわることで様々な気持ちを経験し、最終的に「楽しい」「気持ちいい」という思いに達し充実感を味わっている。だからこそ、子どもにも同じような思いを経験させたいという気持ちになっている。③では、子どもが表現活動をのびのびと楽しめるように、どのような環境を構成すると良いのかということ、さらには子どもの作品を

いかに扱うかということにも考えが及ぶようになってきている。④では、「子どもが主体的に活動に取り組むとき、五感を通して様々なことを学ぶ」ということを実感していることが分かる。⑥や⑦では、表現活動を楽しむことで心が解放され、身近な人や物とも自然に親しみやかかわりが生まれてくることを実感している。さらに⑧では、自分を子どもに、授業者を保育者に置き換えて、その状況を客観的に見つめ、自身が保育者となった時、何を大切に保育を行うべきかを考えている。

このように、学生自身が表現活動を体験しながら、それを子どもや保育のことに思いをつなげているととらえられる感想を述べていたのは、この日の受講者数105名のうち45名であった。感想の記述時間が短く、途中までで提出していた学生が多かったことを考えると、記述できなくとも考えていた学生がいたと思われる。よって、半数は保育者の目線で今回の体験を見つめることができたと考えられる。保育内容「表現」での学びを、自身のものにしていく学生が約50%であることが理解できた。⑤の感想のように、約1年前のオープンキャンパス参加時には、自分が活動に取り組み「楽しかった」「またしたい」といった感想で終わっていた学生が、入学して約4か月でこのように考えられていることは大きな成長であると言える。

3. おわりに

以上のように、保育内容「表現」の授業における学生の学びを、表現遊びの実践（小麦粉粘土遊び）の感想から確認した。そこからは、学生が自分を表現する体験を通して心身を開放し、感性を高めている姿を見ることができた。そして、表現活動を経験する中で自分が感じたことを見つめることで、子どもの表現を受け止めよう、豊かなものにしようとする思いが生まれていることが分かった。このことから、この表現遊びの実践とそれまでの授業内容が、学生のより良い学びにつながっているということが理解できる。

しかし、このような学びが確認できたのは、受講者の約50%である。まだ授業の内容に改善が必

要である。今回、遊びの実践が小麦粉粘土遊びのみであったので、今後、音楽表現や身体表現等の実践も取り入れたいと思う。様々な表現活動を経験することにより、領域「表現」の中で求められているものが、決して子どもの表現技術を高めるものではないことが実感できるのではないだろうか。そして、実践と振り返りを繰り返すことで、より深い学びが得られるのではないだろうか。さらに、今回、学生が自分自身で実践を振り返ったところで終わっていたので、より深い学びを得る方法として、互いに感想や考えを伝え合う場や、授業者が学生の学びをまとめ、学生に還元する場を設けることも必要だと考える。そして、実践活動のたびにその目的と振り返りの視点を授業者が繰り返し伝え、常に保育者の目線で物事を見つめる習慣を学生に身に付けさせたい。

また、今回の学生の学びの確認は、“保育者の目線で活動を振り返ることができているか”という視点が大きかった。しかし、それをさらに細やかに確認していくことが必要ではなかったかと思う。たとえば“活動内容について”“環境構成について”“保育者の言葉掛けについて”など、詳しく確認することで、学生一人一人、さらにクラスや学年の学びの傾向が見えてくるのではないだろうか。今回の感想をこれからさらに細やかに確認し、今後の保育内容「表現」の授業内容や授業計画を考えることにつなげていくことを課題としたい。

参考・引用文献

- 1) 文部科学省 幼稚園教育要領解説 2008年改訂版
- 2) 厚生労働省 「保育士養成課程等の改正について(中間まとめ)」平成22年3月24日
- 3) 平田智久・小林紀子・砂上史子編(2010) 保育内容「表現」 ミネルヴァ書房
- 4) 無藤隆監修(2007) 事例で学ぶ保育内容 領域表現 萌文書林
- 5) 伊達由実・村田夕紀・原祐子(2013) 新設科目「保育内容・表現(総合)」における学びと課題